あこがれるのをやめましょう

校　長　　武井　正明

昨日『Niigata Champions League2025』決勝戦 桐生大附対星稜戦が、見附球場で行われた。吉中も健闘、桐生大附に準決勝でタイブレークまでもつれる好試合を展開した。

閉会式前に本部席から決勝を観ながら、全中でもないのに新潟でこんな最高レベルの試合が観られるなんて…感動した。

そこまで。と思われるかもしれないが、その昔、新潟県は「野球後進県」と呼ばれた。

忘れられない場面がある。小学校３年頃、新潟県代表校は甲子園で、エラーを重ね初戦で敗退した。これはいつものことだ。１勝したら大騒ぎの時代だった。しかし、私がショックだったのは当時の解説者だった光沢毅の「キャッチボールからやり直した方がいい」という屈辱的な言葉だった。私は新潟県がバカにされたようで本当に悔しかった。

だから、新潟県の野球の歴史とは「負け犬根性との戦い」と言っていい。そして、2009年の日本文理が準優勝したことで県民の溜飲は下がった。長い負の歴史とようやく決別し、新潟県の野球界は、大きく躍進の道を歩みだしたのだ。

今回これだけの強豪校が、この大事な時期に、遠路わざわざ新潟に来てくださった（星稜中は二日とも石川県から日帰り）のは、脈々と受け継がれてきた新潟県中学校野球部指導者の方たちの、並々ならない努力があったからこそである。この信頼関係の構築は、一朝一夕にできる事ではない。

私は閉会式で「この２日間で新潟県の野球レベルが二段階上がりました」と言ったが、決して大袈裟なことではない。決勝を戦った２校の主力選手たちが、グランドに感謝の気持ちを持ち、試合を振り返りながら丁寧にグランド整備していたのが明確に伝わってきた。試合だけではなく、その後の彼らの振る舞いに、強さの本質を見た気がする。

吉中ナインが星稜中に練習試合を申し込み、胸を借りに行ったのが昨年 11 月。この時、私は監督以下選手たちの「本気」を感じた。そして、来月北信越大会で星稜中との対戦を実現した彼らに、あらためて敬意を表したい。

2023 年の WBC 決勝で、大谷翔平は「あこがれるのをやめましょう」と檄を飛ばした。

そう、吉中野球部は星稜中を倒すために、ここまで努力してきたはずだ。

だから、あこがれている場合ではない。

私は決勝戦を、対戦相手の関係者のひとりとして観戦した。

ヘタな小細工は、全く通用しない相手であることだけはわかった。

つまり、全身全霊、一球一球集中して、強気で戦うことだ。イメージは強豪を次々と倒していった 2009 年の日本文理だ。めざすは灼熱の横浜スタジアム。スケジュールはもちろん空けてある。絶対に、勝つ、勝つ、勝つ‼